

スポーツを広げた金栗四三



取材協力：熊本県・玉名(たまな)市



1891年、春富村(はるどみむら)に生まれた四三が、1912年に第5回オリンピックストックホルム大会に出場したのは20才の時です。この後、アントワープとパリの大会にも出場しました。現役引退後は、スポーツの振興(しんこう)に尽力(じんりき)しました。海外では女性もスポーツを楽しんでいたのを見た四三は、「女子にもスポーツ教育が必要」と考え、女子テニス大会などを開催して女子体育に力を入れました。四三さんは体育のために走り続けた人生だと思います。(小5/S・K記者)

昨年12月25日、K-1 THE(きつて)丸の内地下1階、東京シティアイパフォーメンズゾーンに「日本マラソンの父金栗四三のふるさと展」の取材に行ってきました！
「日本マラソンの父(ふきゅう)にスポーツの普及(ふきゅう)に尽力(じんりき)」
 ついで、2カ月前、市に寄贈(きょうぞう)された金栗さんの家から、なんと80枚もの写真が見つかったそうです。その中には、金栗さんが女性と一緒に走っていたり、障がい者に合わせたスポーツを行っていたりする場面が映っているのがありました。当時

スウェーデンとの交流も！
 ストックホルム大会のとき、スウェーデンのペトレ家に助けてもらった四三。そのお孫さんの蔵士義明(くらよしあき)さんが2014年7月14日、ストックホルムにて、100年前と同じコースを走るマラソン大会と、除幕式(じよまくしき)がありました。(小5/S・K記者)

ランニングシューズの元祖の改良
 当時の日本は運動靴が普及していませんでした。金栗四三の走りを支えていたのは足袋(たび)でした。金栗さんは、ここ文京区にある足袋店「播磨屋(はりまや)」で特製の足袋を作ってもらい、ストックホルムオリンピックに出場しました。
 「自分のほしい足袋はなかなか外国人選手はシューズをはいてくのを開けました。」
 金栗さんは「視覚障がい者も走れるように」と、50m、スタートからゴールまでひもをはって走れるようにしたそうです。このアイデアは金栗さんならではのものだと思います。(小5/MO記者)

ぶちトリビア
 日本マラソンの父と言われる金栗さんは何センチの足袋をマラソンに取り組んでいたのでしょうか。実際には、足袋のサイズは25cmほどであったようです。
 また、女子体育の功績(こうせき)についてはもちろんですが、教師としても生徒たちに大変人気の先生でした。教科は地理(ちり)・オランダ語(おランダご)・英語(えいご)です。このアテアは金栗さんならではの経験(けいけん)をまじえて語(ことば)る金栗さんの授業は、実感がもっており、大変魅力(みんり)のある授業だったそうです。

ふるさと玉名から
 玉名市では当時の播磨屋(はりまや)でつくられていた金栗足袋をモチーフとして、「ふるさと納税(なせ)のうせいの返礼品(へんりひん)」として紹介されています。



金栗四三のエピソードについて取材！



玉名市のランニング足袋(たび)